



**Data** 2023-149

監督: ヴィム・ヴェンダース  
脚本: ヴィム・ヴェンダース/高崎卓馬

企画・製作: 柳井康治

出演: 役所広司/柄本時生/中野有紗/アオイヤマダ/麻生祐未/石川さゆり/田中泯/三浦友和

## 👁️👁️ みどころ

役所広司がカンヌで主演男優賞をゲット！これは、師匠の仲代達矢も成し得なかったことから、まさに「青は藍より出でて藍より青し」だ。でも、そんな本作のタイトルが英語の『PERFECT DAYS』、監督がドイツ人のヴィム・ヴェンダースなのは一体なぜ？

また、「The Tokyo Toilet (TTT) プロジェクト」とは一体ナニ？そして、ユニクロの代表取締役・柳井正の次男たる柳井康治がなぜ本作に出資しているの？

本作のテーマは、「WHO is HIRAYAMA?」。公衆トイレの清掃員としてイチロー以上のルーティンを守って生活している中年男（老人？）の生きざまに、なぜカンヌ国際映画祭の興味と関心が集まったの？それは本作を観ればすぐに理解できるはず。そして、役所の快挙にも納得できるはずだ。

もっとも、平山の生活は病気になればたちまちアウト。したがって、一見理想的に見える彼の生活は“孤独死”と隣り合わせの綱渡りの生活（=PERFECT DAYS）であることも、合わせてしっかりと考えたい。



### ■□■カンヌで2つの快挙が！役所広司さんおめでとう！■□■

2023年の第76回カンヌ国際映画祭で2つの快挙があった。第1は、是枝監督の『怪物』（23年）の脚本を書いた坂元裕二が脚本賞を受賞したこと。第2は、本作で役所広司が主演男優賞を獲得したことだ。カンヌ国際映画祭での日本人の主演男優賞の受賞は、2004年の第57回の柳楽優弥以来2人目だ。役所は1997年にパルム・ドールを受賞した今村昌平監督の『うなぎ』（97年）でも主演しているからすごい。

役所の俳優業における師匠は仲代達矢。仲代は黒澤明監督の『用心棒』（61年）、『椿三十郎』（62年）等で、三船敏郎と共演する立場で際立った存在感を見せつけていたが、カ

ンヌ国際映画祭での主演男優賞は獲得していない。そう考えると、役所と仲代との師弟関係は「青は藍より出でて藍より青し」だ。役所広司さん、主演男優賞受賞、おめでとう！

## ■企画・プロデュースは誰が？監督は誰が？■

全世界に事業展開しているユニクロ（株式会社ファーストリテイリング）の代表取締役の柳井正氏は1949年2月7日生まれだから、1949年1月26日生まれの私と同じ団塊世代であり、競争社会を生き抜いてきた人物だ。他方、本作を企画・プロデュースした柳井康治氏は、その柳井正氏の次男で、株式会社ファーストリテイリングの取締役、有限会社MASTER MIND 代表取締役を務めている人物だと聞いてビックリ！彼の本作についての思いは、パンフレットに書かれているので、これに注目！また、パンフレットには柳井康治氏と作家川上未映子との特別対談も収録されているので、これも必読だ。

他方、本作の平山正木役には役所広司しかないと考えて、本作の監督を務めたのは、『パリ、テキサス』（84年）、『ベルリン・天使の詩』（87年）等で有名なドイツ人監督のヴィム・ヴェンダースだ。パンフレットの中で、彼は「これ以上の言葉を私は見つけることができない。役所広司は、監督をする者にとって最高の俳優である。彼こそが俳優である。彼こそが平山であり、『PERFECT DAYS』というこの映画の心臓であり、魂なのだ。」と語っているので、それに注目！しかし、なぜ、ドイツ人監督のヴィム・ヴェンダースが、後述のTHE TOKYO TOILET (TTT) のことを知り、本作のような脚本を高崎卓馬とともに書くことができたの。本作の鑑賞者はすべて、そのことをしっかり考える必要がある。

## ■WHO is HIRAYAMA?(1)彼のルーティンは？■

小学生の頃の1日はとても長かった。また、小学生の頃の夏休みはとてつもなく長かった。しかし、来年1月に75歳を迎える今の私の1日、1週間、1ヶ月、1年の経つスピードの早いこと、早いこと！それは驚きだ。しかして、役所広司演じる本作の主人公、平山の1日は？彼の起きる時間は毎日午前5時15分、歯を磨き、TTTのユニフォームに着替え、車に乗っての出勤は5時半だ。車に乗る前に自宅前にある自動販売機で缶コーヒーを1個買うのが習慣だが、その他、毎朝の彼のルーティンは？大リーグで長い間活躍したイチロー選手は誰よりも自分の毎日のルーティンにこだわっていたそうだが、多分、平山の毎朝のルーティンはイチロー以上！さらに職場である渋谷の公衆トイレに到着してからの彼の仕事のルーティンもしっかり決まっているから、平山の働きぶりは、試合日程に左右されるイチロー以上だ。

くだらないTVドラマと同じように、近時の多くの邦画は大げさな演出や大声でのセリフが目立つが、本作導入部で描かれる、ある1日の平山の生活の中には、セリフがほとんどない。まれに車の中で1人で喋る人もいるが、普通は車の中では音楽をかけるだけで、運転している本人が喋ることはないはずだ。本作で面白いのは、平山がカセットで聴いている音楽の傾向（好み）。かつて、片道約1時間の車通勤をしていた当時の私も毎日カセッ

トテープを聴いていたが、平山が好む音楽の傾向とは？私には彼の好み意外だったが、さて、あなたはそんな平山の好みをどう考える？

本作のパンフレットには「WHO is HIRAYAMA?」と題するページがあるので、それを読みながら、自分なりの平山像=WHO is HIRAYAMA をしっかり構築していきたい。

## ■□■WHO is HIRAYAMA?(2)TVなし。音楽と小説好き！■□■

仕事に行く日の平山のルーティンは本作に何度も登場するが、仕事が終わった後のルーティンは？さらに休みの日のルーティンは？彼が住んでいるのは古い木造の2階建てアパートだから、台所はついているが風呂はない。浅草にまだ銭湯が残っているのが私には新鮮だったが、本作では仕事を終えた平山が銭湯の電気風呂でくつろぐ“至福の時間”をしっかり共有したい。

私が感心するのは、取り立てて学があるとは思えない平山が、寝る前に必ず本（小説）を読んでいること。布団に寝転んで読書することは小学生や中学生には厳禁だが、平山ぐらゐの歳になればそれも OK。どんな本を読んでいるのかに興味津々だが、意外にもその幅が広いので私は平山の教養の高さ（？）にビックリ！また、小さなベランダながら、平山は植物（植木）を育てるのも好きらしい。さらに、あの種の音楽（カセットテープ）が好きなことが驚きなら、カメラ撮影が大好きなことや、毎週プリントアウトした写真を整理して保管しているのも驚きだ。

他方、平山に女関係がないことは明らかだが、時々1人で飲みに行く（食べに行く）行きつけの店（スナック？）があり、そこに歌のうまいママさん（石川さゆり）がいるのも人情味があっている。その他、セリフのほとんどない本作でも、ヴィム・ヴェンダース監督流の WHO is HIRAYAMA の描写が進んでいくと、少しずつ平日と休日の、そしてまた表も裏も全部ひっくるめた平山の間人味が浮かび上がってくるので、それに注目！

## ■□■「TTT ART PROJECT」に注目！公共性とは何か？■□■

大阪市は 2011 年 12 月の橋下徹市長の登場によって、目に見える改革が急速に進んだ。私が最も強く実感したその改革の第 1 例は、中之島公園からの青テントの撤去であり、第 2 例が市営地下鉄のトイレの改善だ。前者は、事務所や自宅、そして裁判所のすぐ近くだからその改善ぶりが毎日目についたし、後者は 2015 年の大腸がんの手術以降、地下鉄のトイレを利用する機会が増える中で実感したことだ。

そんな私も寡聞にして、東京都が始めた TTT (The Tokyo Toilet) のことを全く知らなかった。本作では、平山が住む古いアパートからすぐ近くにスカイツリーを見ることが出来るから、あの辺りに詳しい私は彼の住居地の想像がつく。しかし、毎朝彼が走っているのは高速道路だから、彼はいったいどここの公衆トイレの清掃に向かっているの？それがなかなかわからなかったが、TTT が渋谷区の公共プロジェクトだということがわかると、彼の職場もその渋谷にあることがわかる。

TTT とは、「誰もが快適に利用できる公共トイレを渋谷区 17 カ所に設置する「THE

TOKYO TOILET」プロジェクト」のこと。日本財団のHPには次の通り書かれている。

#### THE TOKYO TOILET とは

トイレは日本が世界に誇る「おもてなし」文化の象徴。しかし、多くの公共トイレが暗い、汚い、臭い、怖いといった理由で利用者が限られている状態にあります。本プロジェクトでは、渋谷区の協力を得て、性別、年齢、障害を問わず、誰もが快適に使用できる公共トイレを区内 17 カ所に設置します。

それぞれのトイレのデザインには、世界で活躍する 16 人の建築家やデザイナーが参画。優れたデザイン・クリエイティブの力で社会課題の解決に挑戦します。

2023 年 3 月に、17 カ所すべてのトイレの設置を完了しました。

本作のパンフレットには「The Tokyo Toilet」の項目があり、そこには計 16 箇所のトイレの写真が収録されている。それらはすべて、隈研吾、安藤忠雄等の有名建築家の設計によるモダンなものだからすごい。かつて公衆トイレ（便所）といえば、臭くて汚い場所の代表だったが、それが今や大変身！それは各家庭でも同じで、私の小学生時代は汲みとり式だった便所は今やすべて水洗式になったうえ、TOTO、INAX 等のトイレ用品の進歩はすごい。その最たるもの（革命的なもの）がウォシュレットだが、そのようなハードの進化とは別に、公衆便所の公共性とは何か？について、私がライフワークとしている都市計画（事業）の公共性と同じように突っ込んで考える必要がある。本作を鑑賞すれば、その大きな契機になること間違いなしだから、その意味でも私は本作の大ヒットを期待したい。

#### ■多彩な共演者が見事な引き立て役を徹底！■

本作で私が感心したのは、本作に登場する多彩な共演者たちがすべて、平山役を演じた主役の役所広司を引き立てる役割を徹底的に果たしていることだ。その 1 番バッテリーは、平山の同僚で TTT に所属するトイレ清掃員として働いている若者タカシ（柄本時生）。柄本時生の芸達者ぶりは子供の頃から有名だったが、近時はさまざまな映画で主役級として活躍している。そんな柄本時生扮するタカシが、本作前半では平山とはすべての面において対照的なキャラを発揮するので、その姿に注目！それにしても、タカシがあればほど入れ込んでいた女の子アヤ（アオイヤマダ）から袖にされてしまったのは仕方ないが、アヤはなぜいきなり車の中で平山の頬にチューをしたの？その女心と平山の意外な中年男（老人男）としての魅力もしっかり考えたい。

また、近時の三浦友和の助演者としての能力の凄さは『ケイコ 目を澄ませて』（22 年）『シネマ 52』（185 頁）等で実証済みだが、本作後半に、スナックのママ役（？）として歌手・石川さゆりが登場したことにビックリ！ヴィム・ヴェンダース監督があえて俳優としては素人の彼女をこの役に起用したこの意味はスクリーンを見ているとすぐにわかるので、それはあなた自身の目でしっかりと。さらに、毎日の暮らしのルーティンはイチロー以上にもしっかりしていても、そこに何の華やかさもときめきもなかった平山の暮らしの中に、中盤から突然華を添え始めるのは、女子高生ニコ（中野有紗）の登場だ。ニコは平

山の妹・ケイコ（麻生祐未）の娘だから、平山の可愛い姪っ子だが、なぜニコは家出先として平山の家を選んだの？また、なぜ平山はそれを当然のように受け入れたの？それによる平山のルーティンの変化は迷惑なこと？それとも・・・？

ニコの家出物語の結末には大きな波乱はなく、結局収まるところに収まっていくわけだが、本作に見るこの家族模様の展開は、「WHO is HIRAYAMA？」という本作のテーマを考える上でも大きなポイントになるから、その展開をしっかりと見極めたい。

## ■□■カネ＝宣伝力の大きさをどう考える？■□■

本作の全国公開は2023年12月22日（金）だが、同日の読売新聞は3面を使って本作を紹介し、役所広司のサイン入りの挨拶や本作の見どころを紹介した。さらに「このヒト」のコーナーでは、柳井康治を紹介している。それによると、本作の製作費は3億5千万円。そしてそこには「トイレも映画も個人の資産管理会社の出資で、ユニクロとは関係ないが「根本はつながっている」と語る。」と書かれている。他方、私が去る12月15日にDVD鑑賞した伊地知拓郎監督×小川夏果プロデューサーによる『郷 僕らの道しるべ』（23年）の製作費はせいぜい数千万円だ。したがって、その製作規模は戦艦ヤマト vs 駆逐艦、いや戦艦ヤマト vs 水雷艇ほどの違いがある。

映画（作り）には金がかかるとは。したがって、製作費の回収のためには宣伝が必要。それは当然の理屈だが、そこで問題になるのが、芸術主義と商業主義の対立だ。私は12月22日の読売新聞のような形で多額の金をかけた宣伝をすることを否定するものではない。しかし、宣伝面が先行しすぎると、北野武監督の『首』（23年）のようになってしまう危険がある。もっとも、『郷 僕らの道しるべ』がいくら素晴らしい作品だと言っても、観客が集まらなければ所詮自己満足で終わってしまう。

本作が商業主義に走ることは誰よりも平山が望んでいないはずだが、その点、資金面を一手に握る柳井康治氏はどう考えているのだろうか。私としては、そんな点も興味津々だから、本作の興行収入とラストの収支報告にも注目していきたい。

## ■□■最後にひと言、本作の理想化に警告を！■□■

人によって多少の違いはあるものの、いくら女好きの男でも、70歳近くに近ければ、女なしの生活でもOK。他方、人によって多少の違いはあるものの、長年サラリーマン生活してきた男ほど、自由と気ままさを好むものだ。そんな視点で考えると、平山の生活は一見タイトル通り「PERFECT DAYS」とも思えるが、もし平山が病気になったら？誰かの介護を必要とする生活になったら？TTTの失業保険がどうなっているのかは知らないが、彼の「PERFECT DAYS」は一瞬にして崩れるはずだ。

したがって、いくら本作がヒットしても、平山の生活を「PERFECT DAYS」と理想化することは危険だ。私は本作を高く評価するものの、平山の「PERFECT DAYS」の裏側に潜む危険性も同時にしっかりと考える必要があると考えている。

2023（令和5）年12月27日記